

文化財だより

第 18 号

平成17年 3 月

発行 真鶴町教育委員会

特集 古き時代の道案内 石造物再発見

霧晴れ間

かすかに望む

真鶴の過去

石造物は

何か言いたげに囁く

対面し読み考える

なる程とは思うが

唯 それだけ

ううんと唸る



岩村 石工中興祖の墓

歴史を秘めた墓二つ

平成九年から四年をかけて実施した町内石造物悉皆調査に基づき、石碑、石造物の意義や真鶴町との相関などを調べてまいりました。

一般に文化財の範疇から墓石類は

調べよう 調べよう

関連した諸資料を

過去に遡り

広域に跨り

触手を伸ばす

発見の喜び

真鶴理解への一歩

楽しみは我に返る

除外されるのですが、今回は特例として三件の墓塔が含まれています。その理由はこれらが単なる個人の墳墓・供養塔ではなく町の歴史を伝えるものだからで、その中の二つを次に紹介しましょう。

筑前から来た石工七人の墓

天正十八年（一五九〇）の家康の江戸入府にはじまる江戸築城は、寛永十三年（一六三六）に一応の完成をみるまで徳川三代約五十年を要しますが、その最終期の寛永十二〜十三年赤坂外郭門普請を賦課され、用材の調達から石垣築造までを担当することになった筑州福岡二代藩主黒田忠之は、まず家臣小河政良以下の要員をこの地に遣わします。伊豆堅石

目次

特集 古き時代の道案内 1

歴史を秘めた墓二つ 1

文化財審議委員長

湯本 満

江戸期の石仏が語る歴史

平和への祈り 3

文化財審議委員

櫻井 武

手水鉢が語る江戸築城秘話 4

文化財審議委員

小野間 松男

石造物の碑文から郷土発見 6

文化財審議委員

川口 仁 斎

大切な水道記念碑
昭和の石碑から 7

文化財審議委員

川ノ邊 昭治

平成十六年度文化財保護事業 8

の名で諸国に知られるこの付近の石材を確保するためでした。

その折政良に従って来向し、岩村小松原の山丁場（後にいう口開丁場）の開発に功あった七人の石工を、村人が岩村石工業中興祖とあがめて造建した石工先祖碑（安政六年再建）が専祖畑（町役場近くの高所）にあります。その先祖碑の傍らに並ぶ七基の墳墓をご存じでしょうか。

石工先祖碑には、「元祖古元業源格衛」とともに「中興祖（中村久左衛門・堀江吉大夫・長崎十左衛門・小野太右衛門・淵上角左衛門・河原里兵衛・森田四六兵衛）」の七人が刻まれているのですが、墓石七基の中には淵上銘のものは確認できず、ただそれらしい一基が見えます。

向かって左から二つ目の墓石には名号三字分「南無阿」と両脇に「寛永」「七月」が読めるだけで、下半分は欠失していますが、配字の模様から推して、欠損部には他と同様氏名があったはずで、その名は淵上角左衛門と断定してよいでしょう。

次にこの七人の出自ですが、いわば顕彰碑である先祖碑に、当村石材業の中興祖と刻まれるほどであれば、まして石場奉行小河政良の眼がねにかなうほどであれば、一介の渡り職人ではありませんまい。山見開発に長じ、しかも岩村の石工総仲間の崇敬をあつめるほどの技量の者とすれば、おそらく築州黒田藩内選り抜きの石工棟梁だったのではないでしょう。当国でいえば小田原藩抱えの石屋善左衛門のような。

それはそうと不可解なことがあります。七人の没年月日をたどると、

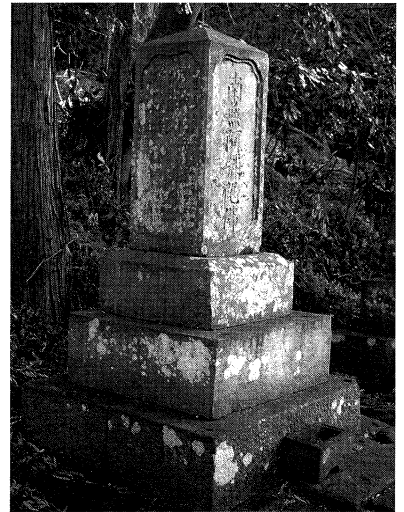
寛永十二年四月から九月までの半年間に全員が死亡していることがわかるからです。これはどう見ても不自然で、この墓石群にまつわるミステリーと言うほかはなく、今後の解明が待たれます。

尻掛浦開発由来を 刻む田広家墓

バス停「尻掛入口」から海岸へ下る路傍の、草蒸した墓所に立ち並ぶ田広家旧代縁者の墓標十数基の中に、ひととき目立つ先祖墓が二つあります。

その一つ、前面に「南無阿弥陀仏」背面に「天明三年（一七八三） 帰元 釈教順信土」と刻む塔身の両側面に、寛永十四年（一六三七）初代田広与次兵衛が生国紀州からこの地に至り、出稼ぎ漁の拠点として尻掛浦をひらいた由来と、紀州や他郷出身でここに果てた漁夫たちの菩提を弔う趣意の刻文が見られますが、百数十年來の家系の由緒を墓碑に誌した例は大変めずらしく、また地域ゆかりの漁業史をかいま見せる金石文としても価値ある史料と言えます。

寛永から幕末期に至る与次兵衛累



田広家由来を語る墓碑

代（襲名）の鰯網漁の業態と歴史経過については「田広家文書」（町指定文化財古文書31・32）をご覧いただくとして、紀州の漁人田広与次兵衛が、この地に東国における出稼ぎ漁根拠地を構えるに至った経緯のあらましを、上記文書中へ尻掛浦由来根元記から抄記してみよう。

与次兵衛は、紀伊国海士郡大崎村田広彦右衛門の養子でしたが、その後彦右衛門に実子が生まれると複雑な心境に立たされ、やがて田広家の家督を断念し別に身を立てる決意を固めるようになります。

彦右衛門は大船（廻船）四艘を持つ網元兼船持でしたから、与次兵衛は一家の事情もあって、おそらく地元しんがけの漁事よりも他国回りの船頭として活動することが多かったでしょう。

そして寛永十四年春、東国への回航の途中、荒天を避けて真鶴浜に碇を下ろした。このように与次兵衛と真鶴との出会いは、彼自身も予期しなかった偶然事であったと言えます。

航海中たまたま真鶴沖で難風に遭った。風待ちの間の退屈しのぎに陸へ上がり歩き回った。その折眼下の尻掛海面におびただしい鰯の魚群を発見した―これら事象のどれ一つを欠いても、彼と尻掛浦との結びつきは生まれなかったことを思えば、まったくの偶然、言うなれば運命的な出会いだったわけです。

切り立った海崖沿いを回遊する鰯魚の習性を熟知していた与次兵衛は、帰国の後も尻掛浦での光景が忘れられず、思案の末ここは豆相沿海唯一の鰯漁場になると見立て、ためらうことなく関東出漁の拠点と定めました。そしてこの予見は的中し、以降紀州藩江戸表ならびに小田原藩御用達を掌中にする相州尻掛浦鰯網与次兵衛として名を成したのでした。

なお上掲由来記中「尻掛の浦を拵え名づけて尻懸浦と号す」のくだりが注目されます。「尻掛の浦」つまり尻掛場（仮の宿・休息地）一帯を開拓整備したうえで尻懸浦と名付けた

というふうに取り読み取れますから、「尻懸（尻掛）」の地名は与次兵衛の命名によるもので、それ以前は名もない小さな入江だったということでしょう。



座像彫り浮き如来迦釈

ふたつの石造物
真鶴駅の北にある西念寺。境内に上る参道脇に石仏があります。穏やかな顔をしたお釈迦様の座像です。門を出て真鶴聖苑の方向へ歩くと、道沿いに二つの石碑があります。三角の板状をした石碑に目をこらすと、表面に極楽東門という文字と五体の仏様（五智如来）が線刻されていることに気づくでしょう。このふたつの石像物はいずれも江戸時代のはじめ、慶安五年（一六五二）八月十五

日という同じ日付で造立されたものです。施主は真鶴村の露木半兵衛。釈迦像は西念寺に、板碑は発心寺にあてて奉納されました。作者はいずれも林貞と記されています。岩海岸にある如来寺跡洞窟の石仏群を彫った高名な作仏聖、但唱の弟子です。京都蓮華寺にある但唱像を彫った人物です。またこれらには、半兵衛の家族の名や協力者、先祖代々の名が刻まれています。このふたつの石造物からは、戦国の世から、江戸時代のはじめにわたる約二百年の歴史を読みとることができのです。

時代の転換点を生きた親子

石造物には半兵衛が三十八歳の時にこれを奉納したと刻まれています。すると彼の生年は元和二年（一六一六）と計算されます。前年、大坂の陣で豊臣家が滅亡しています。また、当主半兵衛の名の隣には、父である先代の戒名と、不明瞭ながらその没年が記されています。先代の生年はおそらく戦国末期にさかのぼるでしょう。親子二代で戦国の世の終焉と徳川の時代の始まりを体験したことが知られます。

江戸城築城と作仏聖

天正十八年（一五九〇）、小田原の

北条氏が滅亡し、かわって三河の徳川家康が、江戸を本拠として関東を治めます。江戸城の築城は、全国統一後、慶長八年（一六〇三）に家康が征夷大將軍となって幕府を開いた頃から本格化します。石材の供給地として伊豆東海岸が開発され、真鶴はその中心的な地域となりました。作仏聖の林貞に先祖の供養碑の制作を依頼した露木半兵衛家は、この江戸城築城に際し、石材搬出を地元で担った一家であつたと考えられます。

作仏聖は石材業に従事する人々を精神的に支えた宗教者でした。「大地自然に仏を見いだす」という考えの象徴である五智如来像の制作（「作仏」）などを通し、厳しい自然と格闘して生きる人々に救いの道を示しました。半兵衛親子は彼らと密接な関わりがあつたと推定されます。

さて、江戸の築城は慶長八年から寛永十三年まで、三代の將軍により、数十年以上の歳月が費やされました。まだ成立して間もない江戸幕府の求心力を強化するため、全国の諸大名を動員して行われたものです。その目的は大名の国力をそぎ、長年戦争へ向け

られていた人々のエネルギーを抑えるものでした。「百姓をむさど殺し候事御停止たり」。一般庶民をたやすく殺してはならない、これは家康が征夷大將軍に任ぜられて最初に発布した「郷村令」と呼ばれる法令の一条です。戦争から平和へ。長く続いた戦乱の世を終わらせたいという願いがこめられていました。半兵衛親子はこうした時代を、江戸城築城に関わる真鶴の一族として生きたと考えられます。

戦国時代にさかのぼる

半兵衛の石仏には、彼を含めて七代の当主の名が刻まれていました。江戸時代はじめの庶民の平均寿命は三十代前半とされます。一代を三十七として七をかけると二百年という数字が得られます。これを歴史の中に当てはめると、十五世紀にさかのぼ



門東極樂五智如来線刻

ります。半兵衛の記述を信ずれば、彼らの家のはじまりは戦国時代のはじめ頃になります。映画『ものけ姫』の時代だといえバイメージがつかめるでしょうか。この時代は当地の土肥氏をはじめ、由緒ある武家が滅び、新しい勢力が胎動する下克上のはじまりでした。不安定で無秩序な中、地域住民は次第に支配者に頼るのではなく、村を単位として自力で生き抜く術を身につけていきます。鎮守の神を中心に、自治と経営、防衛力を備えた「惣村」と呼ばれる村に変化していきます。村の中には、村を代表して支配者と渡り合ういくつかの有力な家系も形成されていきます。民衆における「家」のはじまりはこの頃からと考えられています。

乱世の終焉

戦国時代は領主も民衆もそれぞれ自分で自分の身を守らなければならぬ時代でした。それは必然的に絶え間のない戦乱を誘発し、同時にその中から、国の新しい中心を目指して覇を競う戦国大名たちがあらわれます。力と道理を備えた者がまとめられ平和が訪れる。織田信長により全国統一が試みられ、豊臣秀吉によ

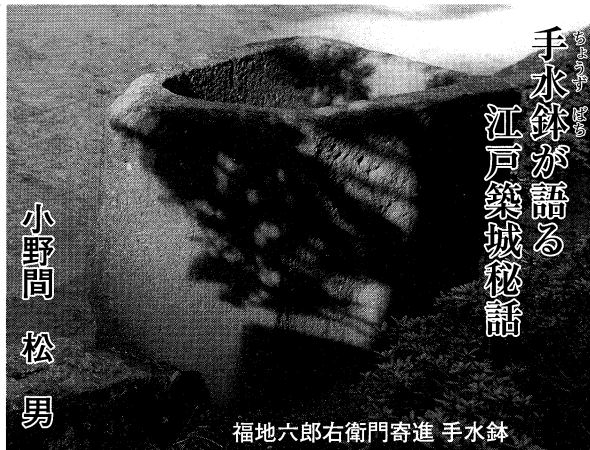
って達成されます。しかし朝鮮出兵を行い新たな戦争を開始してしまいます。それをおさめたのが徳川家康でした。しかし戦争を終わらせるには家康一代だけでは足りませんでした。二代将軍秀忠の時代に大阪の陣が、三代家光の時代には、多くのキリシタンを虐殺した島原の乱が起きます。また、数十年にわたる江戸城築城や日光東照宮などの造営工事は民衆に多大な負担をかけました。それは軍役であり、公共事業というよりは、第二次世界大戦の総動員体制を連想させたでしょう。家光の時代、この負担による民衆の疲弊に、大地震や異常気象が加わり、寛永飢饉と呼ばれる大飢饉に襲われます。

平和への祈り

村や街に餓死者があふれる中、軍事優先だった治世に救済という民政の観点を取り入れて、政権が危機を脱したのは慶安年間に入ってからです。同四年（一六五二）家光は没し、嫡男家綱が十一歳で四代将軍に就きます。幼い将軍でしたが、体制はもはや揺るぐことなく、その後二百有余年、戦争をしない国として日本は出発します。半兵衛の石仏と板碑が建てられた慶安五年はこうした時代

のはじまりでした。先祖代々の名を刻んだ半兵衛は、長く苦しい戦乱の世をくぐり抜け、いまここに至ったことに感謝したでしょう。

手水鉢が語る 江戸築城秘話



福地六郎右衛門寄進 手水鉢

小野間 松男

貴船神社の中段（現在の船玉龍神社）に登る石段の両側に、節理（割れ石）を露わにし、小松石をダイナミックに活用した、余り大きくない手水鉢があります。不等辺四角柱の水溜式手水鉢の側面をご覧頂くと、何やら文字が刻まれています。掌でそつと撫でてみる。何となく文字が浮かび出てきたようです。懐中電燈で斜め上から光を当てて見ます。

寛永十二年乙亥

九州肥前國

鍋嶋信濃守勝茂臣

福地六郎右衛門

奉寄進 手水鉢

六月吉日

と、読むことが出来ます。

これが、真鶴町重要文化財、第一次指定の風外筆『真鶴村貴宮大明神寄進奉加状』に書かれている「寛永十三年丙午 同 手水鉢 肥前國福地六郎衛門」と、同一のものと考えられます。

また、この手水鉢については、『寛文十二年壬子年相州西郡西筋真鶴村村書上ヶ帳 七月』の中に

「一、當村鎮守貴宮大明神：略……

一、手水鉢壹ツ 是ハ寛永拾貳年錦

島信濃守様御内福地六郎右衛門寄進」

また『新編相模國風土記稿村里部足柄下郡卷十一』真鶴村貴宮大明神の

項にも、「石水盤 同十二年、鍋島

信濃守勝茂の臣、福地六郎左衛門寄

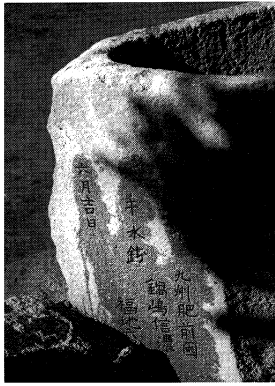
付す」と書かれています。

平成九年度から、真鶴の石碑・石造物の悉皆調査を始め、貴船神社の手水鉢等の実測調査・銘文調査を行い、追跡調査も開始しました。

佐賀県教委の文化課の歴史担当の方と連絡を取り、肥前鍋島家の江戸築城と伊豆東海岸や真鶴での採石を調べてみました。

佐賀県近世史料第四巻『吉茂公御年譜卷之六』(享保八年癸卯)に依れば、「公御歳六十、二月廿二日、去年八月十六日、御作事・御普請両御奉行ヨリ左ノ通廻文ヲ以テ相達セラレ候末、諸役筋旧日記改メ仰付ラレ、且又 勝茂公、長崎御番 仰ヲ蒙ラレ候以來ハ、御手伝其外御役等不被仰付段ヲモ仰達ラレルベキ旨、仰出サル…略……

一、慶長十九年甲寅正月より江戸御城御普請御手伝被仰付、相勤候事、一、場所は虎御門、其外所々石垣之由一、前年豆州多賀・真名竊・伊東より右御普請御用之石運送仕候由、一、御普請御役人不相知…略」とあり、『佐賀県史中巻(五)』には、「記録を欠きますが、慶長十年、慶長十



六年の江戸城築城普請役が伝えられている」とも書かれています。

しかし、『徳川實紀第一篇』(慶長九年八月)には「江戸築城の料として十萬石の額にて、百人にて運ぶべき石千二百十づつの定制としてさぐべきよし令せられ、其費用として金百九十二枚給ふ。舟の数は三百八十五艘とぞ聞えし。これによって大石運送する輩は…蜂須賀阿波守家政。…黒田筑前守長政。…鍋島信濃守勝茂。…」とあり、『徳川實紀第一篇』(慶長十一年正月十九日)に「江戸城修築を仰出さる。…黒田筑前守長政…鍋島信濃守勝茂…」にその事を仰付らる。…と、その上同年二月には「この月江戸城修築の事により、兼て仰を奉はりたる西國大名参府して、をのく家士に命じ、人數若干伊豆の國つかはし石材をとらしめ、三千餘艘のせて江戸に運送す。…」と書かれています。

ますので肥前佐賀藩鍋島家も、慶長九年頃より私達の住む真鶴や伊豆から採石・廻送したことが分かります。また、『地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書3』には、「公儀御普請」(細川家文書)「伊豆石場之覚」出典として

「しとど笠嶋丁場但真名鶴ノ内、石多湊ヨシ、御代官八木二郎右衛門、先年鍋島信濃守勝茂 巳年 伊井掃部直孝御丁場 しとど笠島から円山まで五丁」とあります。

寛文十二年の『真鶴村書上ヶ帳』の「一、石切出シ申丁場」を紐解き考えますと、鍋島丁場は「しとど・駒ころはし・ことうはみ・ついし」丁場などが含まれますが、どの範囲か今後の研究課題です。

次に福地六郎右衛門を調べて見ますと、『葉隠聞書八』校註葉隠に「一、福地六郎右衛門 名は家定 長門守信重次男 三左衛門宗俊弟 鉄砲物頭・御使番を勤め、兄弟一門有馬陣に戦功があつた…略…正保二年六月廿七日没…略…」とありますが、福地兄弟が江戸築城にどう係わったか不明です。

しかし、『勝茂公譜考補』には、「今年ヨリ明十三年迄、江戸城廻所々石垣御普請ノ御手伝被仰付、鍋島若狭守茂綱総奉行トシテ江戸へ到ル…」とあります。その上「地下鉄7号線報告書」の黒田福岡藩「竹森家伝」の寛永十二年江戸外郭の石壁の中に「…忠之公以黒田美作守、井上内記為総司…以竹森貞幸

為修築之総監使…諸家之監使及百余輩…鍋島信濃守者福地三左衛門…」と書かれている事を考えますと、兄三左衛門が江戸外郭修築の監使を勤め、弟六郎右衛門が真鶴を中心として伊豆で採石廻運の作業を進めたとも考えられます。

なお、手水鉢の寄進については、『徳川實紀第二篇』(慶長十一年五月廿五日)「大風雨。江戸城修築のため、豆州より運送の石をつみのせたる鍋島信濃守船百廿艘…くつがへり破損す。…」の大被害の記録と、『徳川實紀第三篇』(寛永十三年五月八日)「江戸城惣郭の營造この日よりはじめらる、所、惣郭の石壘西國、四國、中國の諸大名。…石壘經營を六隊に分つ。…第六は鍋島信濃守勝茂を惣督として、…屬せらる。升形を奉る輩には虎門鍋島信濃守勝茂…」の工事の重要さを考え、福地六郎右衛門が貴宮大明神の例祭日に、大明神の靈験に採石・海運の安全を祈願し奉納したものと推測することが出来ます。物言わぬ小さな手水鉢が語る、江戸築城の秘話を追う。心を奪う道程は、驚きの連続、楽しい時の流れに心は漂います。

石造物の碑文から 郷土発見



兒子神社の手洗鉢

文化財審議委員会では、今まで重要文化財として指定されていない石造物の見直しと、指定の準備がなされてきました。その中の三点をもとに郷土を考えてみます。

岩地区の西側山の中腹にある兒子神社の拝殿東側に今もひっそりと置かれている手水鉢があります。碑文には、

- (正面) (右) 卍紋
(中) 法輪
(左) 巴紋
- (背面) (右) 元禄六癸酉歲
(中) 願主
(左) 當村中

敬白
初春大祥日

と彫刻されており元禄六年（一六九三）に岩の村民が奉納した物であります。

卍の紋は仏教で使う吉祥紋であり、中央の法輪は仏教で説法するときの紋章であります。右側の巴の紋は神道系の紋章であることはよく知られていますが、明治元年（一八六八）神仏分離政策が取られるまで、この地には寺院と神社が併立して存在する、いわゆる神仏混交の宗教儀式が行われていたものと推察できます。

現在瀧門寺の階段下にある五層塔は、もと兒子神社の境内にあったものを現在の地に移転したのだといわれており、この塔には岩松山光西寺という字が刻まれています。

新編相模風土寄稿によれば、治承四年（一一八〇）源頼朝に従う土肥実平を追って来た外孫の万寿冠者が船出に間に合わないで自殺し、その遺骸を光西寺に葬ったとの伝承が記述されており、これから光西寺という寺が存在したと考えられます。

源頼朝が岩海岸より房州（千葉県）目指して落ちのびるときに、追い迫った平家方の兵は村人に、「沖を行くあの船は何か」と問いました。

岩の人達は「鮫追船である」と答

えて頼朝一行を無事逃がしたと伝えられています。

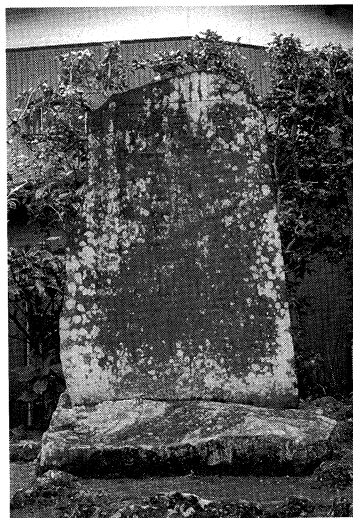
のちに源頼朝は、岩の海岸から落ち延びるときに世話になったことを感謝し、鮫追船の船役を免除したと伝えられています。

のちの後北条政権もこのことを尊重して元亀二年（一五七二）「新造した鮫追船二艘については諸々の税が免除される。もし他からの申し立てがあつたら小田原の役所へ報告しなさい。」という趣旨の朱印状を出しています。

さて、岩海岸の話題を漁業について考えて展開させて見ます。

岩の漁業に関する記事が

出て来るのは、戦国末期の頃からであります。永禄七年（一五六四）の肴鮑海老売買文書には「岩、真鶴において魚やあわび、えびなどを売買するときは良質の貨幣を使用しなさい。悪質の貨幣を使用する者があつても承諾してはいけません。売り手も買い手もこれを守りなさい。また、御印判がないのに勝手に取引をしてはいけません」とあります。往時の漁業は現在的大型漁業と違い根拠をま



半田庄右衛門領徳碑

わって肴、鮑、海老を採取するものであったようです。江戸末期から明治初期まで岩地域では漁業が専業として営まれていたわけではなく半石半漁という形態が続いたようです。

瀧門寺の参道左側にある半田庄右衛門（天保二年生明治八年没）の遺徳を顕彰した頌徳碑には、概ね次のようなことが記述されています。

「岩の地は漁業の利が多いのに、中世以降採石業に重きをなして、漁業を顧みることがなかった。里正（村長）であつた庄右衛門は家々を説いて漁業が再興できるように努力しました。折から明治維新が幕開けとなり、大原侍従公に奏上すると、半田右衛門の忠誠を喜び称えて和歌を詠み、その状況を小田原藩へ伝え、終に漁業再興の願いがかなつたのです。後に里正となつた山本某がその

志を継いで漁業を守りました。村内の有志とともに半田右衛門の遺徳を永く後世に伝えんがためにこの碑を建てるのである。

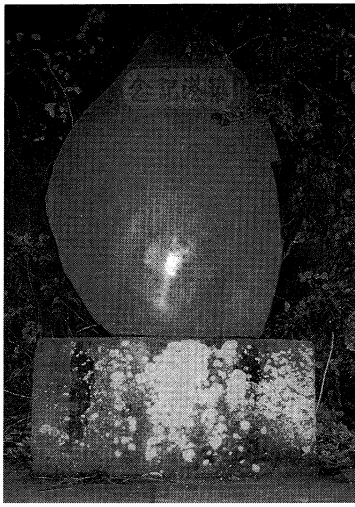
埋もれし沖の石寿へあらわれて
かか美岩とぞ世に残るらん。

明治二十四年十月

この碑が伝えるように明治初期に漁業が再興されたのであります。このことの詳しい様子を知るためには半田家文書の研究が必要です。

半石半漁として村の生活が営まれ続けてきたのですが、大正十二年の関東大震災は近隣近在に多大な被害をもたらしました。岩地区も地震と大津波により多大な損害を被ったのであります。しかし村を上げての復興の努力がなされました。

岩築港記念碑には次のようなことが書かれています。



岩築港 築港記念碑

一方岩港の築港事業は、漁業組合が自力を以って起こした事業であり、村中一致協力した結果ということで、郷土を知る大事な資料であり、郷土の誇りとすることができるものです。

「岩漁業組合は築港計画を立て、大正十四年起工し十万余円を投じて百二十米の防波堤、船揚場と浚渫工事が竣工した。昭和七年政府は時局匡救農業土木事業を起こしたが、漁業組合の自力の大業が県に認められ、国庫補助と地元負担を以て六十米の防波堤と浚渫工事が完成した。岩村漁業組合が初めて着手してから十年、組合員が一致協力して行った事業は自力更正の好模範となるであろう。築港事業は永く光を放ちその恩沢は子々孫々に及ぶことであろう。岩港築港の由来を記して後代へ伝えよう。」

昭和九年四月

真鶴港にも同じ年に同じような築港記念碑が建てられています。その文面からは築港に当たり、行政や政治家への働きかけ、国との交渉の様子をうかがい知ることができます。

大切な水道記念碑



磯崎水源の碑

真鶴で生活されている方々にお尋ねします。

「真鶴の水道水は塩からく飲めもしない」と近隣の人に言われたり、「塩分の多い産湯で育った子どまだ、水泳はお手のもの」と言ったりした時代があった事を知っていますか。

知らない人が多くなつたと思います。それもその筈、昭和三十六年二月にお隣りの江の浦赤沢地区の湧水を引き、ほっと一息も束の間、新幹線南郷山トンネル工事で赤沢の水はストップ。困ったなと思つたら、これが幸せを呼びました。

昭和三十九年、南郷山トンネルの赤沢地域の多量の湧水を、小田原市と約束して町へ引くことができました。

その上、昭和四十五年二月には、五回目の水道を広げる工事も完成し、湯河原町から水を購入する約束

が出来、吉浜上水道から分水してもらいました。ですから昭和四十年以降生まれた真鶴の土地っ子や、真鶴へ移住された新しい人々には、水に苦労された人々の事は知らないし、話に聞いてはいても、美味しい水の飲むことを当たり前と思つてしまふのです。

では、真鶴の水道開発は、どのような生活実態をどう改革しようと、困難を乗り越えて実施されたのでしょうか。それには、先ず初めに磯崎に水道記念碑が設立されている事を知ることでしょう。

「真鶴は古来水勢なきに苦しむ、屢火難に遭い疫癘に悩めるも其為なり、歳久しく水道計劃の唱えられ水源地を採るも凡て泡沫と消えぬ……（中略）昭和三年春県土木部長三輪周蔵君の指導により其設計に着手し同年九月起工す、昼夜工を励み翌春一月初めて通す全町歓呼す……（略）……之を石に刻して水に苦しまざる子孫に伝う」これが、水道水を渴望した町民に塩分を含んだ水道を完成した時の碑文の前段と後段です。

当時の「水不足」ということと「塩分が含まれていても」の実態・実像は、どの様なものだったのでしょうか。

町史の通史編や資料編、そして真鶴町報一・二号を紐解いてみましょう。町内には川は無く、地下水脈にも恵まれず、水不足に悩まされていました。コレラやチフスは、明治二十三年頃から屢発生し、大正元年、五年、十年のコレラ等の疫病発生時には、水不足による不衛生が問題視され、「横浜貿易新報」は大正十四年四月二十二日号で「別荘地として都会人が真鶴の地を選んでくれても、水不足で別荘地購入を断念している」と伝えているほどでした。

また、度重なる火災も水不足による延焼・類焼による大火となっていました。この様な時、大正十二年九月一日の関東大地震が発生したのです。「人々は消火活動に励げようにも、水が無く土をかけて消火に当たった」と言い伝えています。

真鶴の人にとっては、水源の確保が重要な課題となっていたのです。近隣の村々に水を求める活動は儘ならず、さりとて、地下水脈も現状では手一杯。ただ塩分を含むが磯

崎に湧く、霊泉「弘法の井」に頼る外はないと、「湧水」をコンクリで囲い、消防ポンプで汲み出したが水量は減りませんでした。

当時の町長松本赳氏は、なんとか「水道開設」の認可を得たいと思い、胎中代議士と共に、県警察部長の鯉沼巖氏を訪ね、「真鶴には、磯崎以外には水源は無く、現在もその湧水を飲んでのこと。幾度も火災に遇い、消火の水がなく難渋していること」を説明され、特別のご配慮をお願いされました。

鯉沼氏の県衛生主任との「衛生試験規則と水道条例」の話合い、対応。内務省との折衝と責任問題などに松本氏は鯉沼部長の偉大さに畏敬の念を抱かれたとのことでした。

昭和三年八月十四日、神奈川県知事名をもって「真鶴水道」の掘削の認可が下されました。

水道計画・設計・施工などは、県の専門職員の指導助言を仰ぎながら、井戸の掘削、高さ百米の釈迦堂山へ貯水池の制作、三十馬力のモーターによる送水など、九万八千円の大事業も大蔵

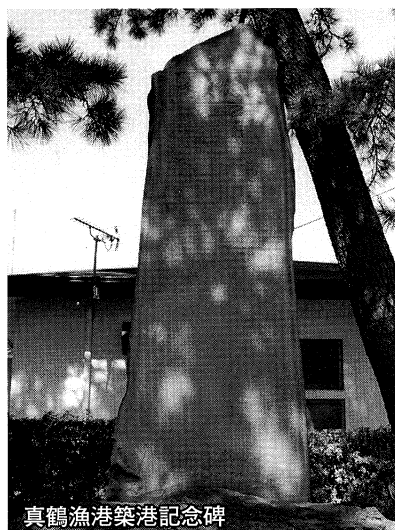
省の低利資金を借用して施工されました。

水道記念碑の陰には、私達町民の知らない、苦心談が秘められているのです。

港の入口に建立された「真鶴漁港築港記念碑」からは、国政不安定な時の築港、町行政の努力を知ると共に、相模湾西岸二十八漁港の願いや開港以後の道路行政なども考えられます。

なお、昭和三十八年に建立された「世界近代彫刻日本シンポジウム宣言碑」からは、日本の銘石、世界の銘石「小松石」の素晴らしさを、彷彿とさせられます。

皆さん、道端に佇ずむ現代碑文を読み、町史を読んでみては如何でしょうか。



真鶴漁港築港記念碑

平成十六年度文化財保護事業



H17.1.25 伊東市宇佐美丁場跡見学

◎文化財広報啓発事業

・文化財だより第十八号発行

・町民センター・民俗資料館展示事業

・各施設で年間六回の企画展を実施

◎文化財審議会調査研究事業

一月二十五日、伊東市宇佐美地区の石丁場跡及び伊東市文化財管理センターへ研究視察を実施

◎文化財審議会協力事業

・教養講座「くすのきゼミ」に講師として協力

◎文化財保護事業

「真鶴の文化財・第二集石材業編」

一部改訂・増刷千冊